

一学期の抱負とその展開

—成長過程のなかで ひとりひとりの姿をおって—



岡田鈴代

(一) はじめに

家庭を中心とした、近隣のごく限られた環境から、今までに、経験したこともない集団に入りこんで、不安をいっぱい感じていた幼児たちを迎えたその日から、私の夢は、大きくふくらみます。しかし、限られた幼稚園の貧困な環境の中から幼児らに何を、どのようにしてと、苦しみがはじまります。

ただ、私どもの熱意と愛情を与えることによって、いくらかでも充実した保育ができないものかと、自分で自分を励まし、希望と祈りの折りまぎったスタートをします。

それにしてもこの頃、自分の保育のやり方に対して不満を覚え、反省しているのです。つまり、幼児の本当の姿を見あやまっていけないだろうか、正しく幼児の要求を理解していない場合が多々あるのではないだろうか。

また、幼児らしい自由な創意や、素朴なはつらつさを、十分に引き出すことができたのであろうかなど、次々と反省の度合が深まるのです。

しかし、そんな苦しみも容赦なく、幼児たちの活動は展開されます。

そこで今年、ひとりひとりの幼児を大切にすること、教育の根本理念に基づいて、どこまで幼児の遊びの生活を、十分に確保することができるものだろうか、辛抱強い愛情の交換を展開したいと思っております。

「もしも子どもが受容と友情と、ともに住むならば、彼は世界の中に愛を見出すことを学ぶであろう(作者不明)」という言葉に心うたれて、私なりの展望と展開について、まとめてみたいと思います。

なお、当市(三重県四日市市)の公立幼稚園は、一年保育です。

(二) 一学期における展望

幼児が満足した遊びをしているときに、最善の発達をするといわれていますが、その遊びが、幼児自身の遊びや仕事を、あらかじめ予想して計画的に、行なう姿は、一学期の初期にはあまり見られず、自分に内在している能力を発揮することによって、遊びに対する喜びを味わっているのがこの頃によくみられます。ですから、五歳児の段階にしては、未熟な内容が続いて、私どもを、はらはらさせたり、また、いっこうに遊びの発展がなく単純な想像性のない場合がみられるのです。

それでは、このような時期にどんな環境を整えてやれば自分たちの遊びに愛着をもち、のびのびとした活動が、ひとりひとりの幼児の間に発展するのでしょうか。

砂場コーナー、一つを例にしても、大シャベル一つ持ち出しても、誰にも迷惑のかわらないくらいに砂があり、砂のトンネルをくぐりぬける汽車の動きにも、広々とした場所があり、必要な材料は物置にあり、珍しい材料の探検にも出掛けるくらいの品物が、山積されていれば、(丸や四角、太い細いなど、あらゆる形の木片からホース、レンガ、タイヤ、エントツ、小ハシゴから板一枚に至るまで)いま自分が、必要としているものが次々と、歓喜した幼児たちの手で運びこまれ活用されるでしょう。そんなと

き、一人で持てぬ材料とか、ダイナミックにならざるを得ないような配慮があれば、しぜん友だちを必要とするでしょうし、そのことにより遊びは、さらに発展するでしょう。

また、秘密の場所を喜ぶ幼児たちのために、各部屋に四か所ぐらい、隅にカーテンを二方引いておくだけで、あるときは虫の部屋に、(ホテルなど観察によい)あるときは仲よしグループの会話の場に、またホテルになったり、かくれ屋になったり、幼児にとつて一等地にあたいする隅の用意をします。

園庭には、虫の巣とともに、木々の茂みがあり、山や、ほら穴があれば、インディアンや仮面などの大活躍の場として、太鼓の音も高々と響くことでしょう。また小高い所に腰をおろし、童話を聞きながら、ゆったりと落ち着いたひとときを過ごすこともできるでしょう。

また、機械類(幻灯、プレーヤー、テレビ、テープ、時計、電話)など、最初から責任をもたせて操作させます。教師のちょっとしたヒントにより、自分たち同士で自由に操作してかけるうち、馴れてきますと、目的をもってかけたりします。弁当を忘れて来たときなど、自分でダイヤルを回して家庭に連絡します。

全身、体当たりで遊べるホールには、マット、平均台といったような体育的遊具が一応おいてありますが、劇遊びや、身体表現の場ともなりますので、大きな風呂敷くらいの色布や、大小それ

その小道具と変装できる箱など整えてやれば、スカートの端をもって表現する身体的リズム反応の欲求を満たしてやれたり、あるときは、基地や格納庫と変じて、自分たちで作ったロボットや、飛行機が活躍して遊べるでしょう。

また、リズム楽器を腹一杯弾いたり、叩いたりするために、防音装置ができた一室があればなど、いろいろと数限りなく望みが生まれてきます。

それについても、どのような活動の場合にも、絶対見逃すことのできない、社会的、身体的、知的、情緒的発達が教師や友だちとの間の信頼や愛情との上になつて、ひとりひとりの幼児にとつて、十分に行なわれなければならないことだと思ひます。

なかでも、一学期には、人的に造り与えたものよりも、素朴な遊びや情緒をたいせつにし、それを強く深く感じ抜き、のびのびと自由に活動させる間に、ゆっくりではあるが、しぜんに充実した活力をのびしてやりたいと願っています。その中で、ひとりひとりの幼児の情緒的反應の治療もできるでしょう。

(三) 展 開

幼児の活動が、はじまりますと、個々の行動の特性もいくらか、はつきりしてきます。

それを大まかにあげてみますと、

(イ) 一つの遊びに、長い時間興味をもち安定して、ひとり遊ぶ幼児

(ロ) すぐに、友だちとの交渉ができ、気軽に近づいて、いっしょに遊ぶ幼児

(ハ) 遊んでいても、興味がなく、常に好きな友だちの後ばかり追つて落ち着きがない幼児

(ニ) 遊びの内容が一つのことに限られて、別の材料や遊具になかなか、手をださない幼児

(ホ) 全然あそぼうとしない幼児

などに見わけられました。中でも(イ)(ロ)が多いのに、とまどいを感じました。しかしわずかぐらいの期間で幼児たちの行動の解を急ぐのは、幼児の理解を固定化するので、それはさけて、教師と十分遊ぶことから、行動の場面で幼児を理解することにしました。

幼児たちが、自由に自分たちでグループをつくつて遊ぶようになることは、幼稚園教育にとつては、たいせつなねらいであります。しかし、そうなる前段階として、一学期では、ひとり一分遊んだり、教師と一対一で、ひとりひとりの幼児と常に遊ぶことの楽しさを経験させてやりたいと思うのです。

そこで、以下に昨年度の実践の例をあげてみます。つまり、これらの実践の上になつて本年度はさらに前述のような点に留意し

で、より充実した指導をしていきたいということのためです。

(1) 入園当初の実践と教師とのふれ合い

遊具をみても全然手もつけずに眺めている無口な幼児が、ふと手にした油粘土を、くるくるまるめているのを見つけた私は、その幼児のそばに坐り、「何かしら、おむすびみたい」といいますと、「はい」と手に渡してくれるので、「うれしい、中に何が入っているかしら、シグレかな」といいながら割って中を見るようにして食べる真似をしました。

すると、次々と二つ三つ、まるめたと思うと中に「これシグレさ」といいながら、ヨーグルトのふたを入れて、私の要求通りのおむすびを作ってくれるのです。「うれしい、たくさんできたのね、じゃあシグレの入ったおいしいのをいただいて」と、少々大きな声で話しながら食べていますと、一人二人と寄ってきて、おもしろそうに、そのようすを見ていましたが、そのうちに彼らも作りはじめ、「お海苔巻いてあげる」なんていいながら、私の口元までもってくるのです。私は周囲の幼児たちの集中のまなざしの中で、いとも大きな口を開けて、ムシャムシャやりますと、幼児らは手をおさえて「フフフ」と笑い声を出してくれるのです。

このような小さなチャンスを十分利用して、ある程度の時間落ち着かせて遊ばせた頃を見はからい、(私は、少々本来の茶目っ気がすぐ飛び出しますので)おむすびを三個石鹼のあき箱に入れ、

おじいさんになって「おむすびころりん」の話を、そばにいる幼児に聞かせました。幼児たちは手をとめて、話のおもしろおかしい動作に自然と頭をふってみたり、「知ってる」といいながらも、口をもぐつかせながら聞き入る態度がみられました。

また、消極的な女児が、大きいまりで一人つきを隅の方でしているのを見て、私は、とかく消極的な幼児は、運動的、言語的な行動が少ないものなのに、この幼児は、まりがうまくつけるだけで、チャンスさえ与えれば自信を得ることもみられるのではないかと思ひ、即座に「ちょっと、こちらへいらっしゃい」とピアノのそばでつかせました。

「じょうずね、ピアノに合わせてくれる」と頼み、まりつきの曲、*4*を合わせてやりますと、うまく合うのでいつまでも楽しそうにつきまします。参加者も二人できた頃、見ている友を誘って、まるく手をつながし、まわりの幼児は曲に合わせて歩き、曲が終わったら止まる。そのときまりをついている人の前に立った人が交代して、中でつくというように少しのヒントを与えますと何の抵抗もなく数人でおもしろく遊びます。このようなことは、いくらでも部屋のおちこちで見られます。(また、リズム反応の基礎的なものも、このように興味を示して、遊んでいるときにとりあげた方が効果的だと思います)

しかし、一日も早くグループ活動をやらせるために行なってい

るではありません。

教師と幼児の心のふれ合いは、このような出会いをたいせつにしながら成立させていくことがあるのではないかしらと思うからです。教師対個人という、つながりを手始めとしているうちに、徐々に幼児同士の交流にもなるのだと思われるからです。

(2) 言語表現の場を広める中で

昨年度は全体的に言語表現が豊かでないばかりか、感情のコミュニケーションをうまくできない無表情な幼児が多くみられました。そこで、幼児から言葉を出させる雰囲気のある場を与えること、どんなことがらでもすぐ聞きとり、その場で認めてやることに努力しました。

自分のことで精一杯だった頃から、少しずつ遊びの意識化がみられるようになった五月のある日、テーブルを使って、簡単な話から問いかけ遊びをしたとき、(牛乳屋さんだけが知っている話より)

「毎朝、牛乳屋のおじさんが、一軒一軒に牛乳を配っているよ、その中の一本が、ゆらりゆらりと空へのぼっていくのです。一体誰がのむのでしょうか。Kちゃんかしら、Dくんかしら」
そばにいる幼児の名前を呼んで問いかけます。

D「お月さま、のむの」

K「お星さまに小さい赤ちゃんが生まれたから、赤ちゃんのむ

の

教師「だれかしらね、一度お空に向かって、大きな声で聞いてみましょうか」

K「ふん」

教師「それではね、高いから大きい声で、はっきりいって」

すると、声を出すことに対して今まで少々躊躇していた幼児も大声を出したのです。

このように、短い会話のやりとりをし、テーブルに入れます。すると、今一度自分たちの声とともに話した言葉を聞くことができるので「あれ、僕が言ったん」と喜びを再現することができず。とかく無口な幼児との話し合いには、教師が一方的に話し、彼らは返事をするぐらいで、あまり内容のある話が生まれてこない場合がありますが、こんなことを、きっかけにしていろいろ話し合いの場をもちます。

また、こんなことがありました。カップ二個に紐を通して頭を一回まわして、前に重ねてライトにしたり、両耳にかけレシーバーにしたり、片手にトランシーバーを持って、気心の合ったもの同士、信号ごっこをしていましたが、トランシーバーをいくつも作って、私に一個手渡し、あちこちから送信してくるので、返答に大奮闘の一幕がありました。

M「こちら宇宙号からです。そちらどうぞ」

教「はい、こちら地球からですどうぞ」

M「はい、先生は、今、何をしていますか」

教「はい、先生は、Hくんのトランシーバーをつくる、お手伝いをしていますよ」

M「Hくんもできたら、あそびなっぺいってください」

教「はい、了解、そちら宇宙はきれいですか、何が見えますか」

M「はい、月や星やいっぱい、ものすごくきれいです」

教「はい、先生もいきたいわ、H君といっしょにでかけますからね」

M「はい、はい」

この会話を聞いて、トランシーバーのでき上がった幼児から次々と送信されてきました。そうして、共通の興味を示してくる幼児たちによって、遊びは発展していき、長時間継続されました。

このように幼児の感情や思考の表現の手段に、ことばや動作を日々の活動の中で十分發揮することができるよう留意したいと思いました。そのためには、教師と幼児の感情的なコミュニケーションが十分に必要なことです。

(3) 初歩的な創造活動の場を広める中で

予想していない事態がおこった。六月一週に入った日、ちょうど大時計の材料をと、ステレオのあき箱を部屋に置いて着色していたのですが、箱を立ててみて、

B「先生、これ僕らがいれるインディアンのかくれ家のように」と時計変じて、かくれ家となりましたので、私は、やしの木にと葉っぱをつけてやりますと、アワワワワの声にもぎやかに、たった一本の木の回りで喜んで出入りしている姿をみました。

B「先生、インディアンのレコードない」

教「ないのよ、ピアノではいけないかしら」

B「いや」

私は、即座に太鼓を与えますと、その場はそれで満足してくれましたが、こんな不用意なことで私は申しわけなく思いました。テレビのまんがレコード、リズム曲、フォークダンス曲、大体一学期に覚える歌など自由に使用できるようにありましたが、今、幼児たちのほしい、インディアンの曲一枚がなかったのです。

それでも面ができ、お友だちも多く加わり役割なども、いくらかみられました。この時期によくみられる特色(つまり、自分のいいいたいことや、したいことを一方的にいいながら遊ぶ)を教師はもっと、ふまえている姿勢がたいせつだと思いました。

また、同じ頃、美しいピンクと水色のリボンをみつめて、手にまいたり、頭につけたりして、「かわいいポルカ」に合わせて、身体表現している数人の女児グループがみられた。

すると、幼児たちは、よく知っているもので、目新しいもの、

美しいものを発見すると自分たちも、きわつたり何か作つたりしている間に、うで時計を思いつき、数多くの時計ができました。

両うでにいくつもはめ、それでもなお作り、机上に並べて小さな店屋ができました。花時計だの置時計だのと、いくらか並べられると買ひ手がきます。

その時、自分の作った作品を手放さない幼児がみられました。

その幼児は、長時間かかつての力作で誰がみてもほしい時計です。お金をもつてくれば、売らないわけには、いかないし、困つた表情で、

A「いや、うらへんの」といって、だきかかえていました。

教「Aちゃん、ほしい時計があつたらかかつてきてもいいのよ」

A「あらへんも」

教「それじゃ、Aちゃんすばらしい時計、いくつも作つてあげてよ、時計づくりの名人ね」といいますと、ようやく手放してくれましたが、依然その品物を、うらめしそうな顔で追っているのです。反面、買い求めた幼児はままごとここの家に置いて喜んでいる姿があるわけです。

教「Aちゃん、お家を買われた時計は、たいせつにおいてありますよ、心配ないでしょ」といいますと、安心した表情で自作にとりかかっていました。自分が熱心につくったものは、深い愛着が生まれるのは、だれしもですから、その気持を十分察して指導し

ていかなければ、その幼児のもつ創作的意欲を認めてやれないことになります。

(4) 自然発生的小グループを広める中

一学期も半ばを過ぎた頃より、自然発生的にできるグループが時々みられます。

(イ) お互いの気持が合う、仲よしグループ

(ロ) 消極的な幼児ばかりで刺激の少ないグループ

(ハ) 遊びの一致によって、そのつど生まれるグループ

などいろいろありますが、特に、(イ)のグループは、なかなか他のグループと交流しない面がみられるのです。

六月も終り頃、この仲よしグループが、室内、廊下、ホールを結ぶ線路をチョークで描きはじめました。せまい園内は、たちまちの間に、白チョークの線路だらけになりました。

ちょうど、昨年度汽車ごっこに使用する材料のいっさいを入れた箱から、ぼうし、かばん、信号旗、切符など次々でてくるのを見て、一時は、どつと歓声をあげて喜んでくれたのですが、そのときは、まだ全部の汽車ごっこの遊具がうまく使いこなせなかったのです。つまりまだ役割分化が、自分たちで話し合つて、できる段階ではないので、一応手にしたものの、縄電車と切符と、一人の運転手と、車掌だけで十分なのです。ですから、いま書いた線路の上を走る、走る列車グループと、切符を買うのが嬉しい、

切符の売り買いグループと二つに分かれてしまいました。

そこで私は、自分たちから発生したグループがどのような遊びを繰り広げるか、興味深く見守っていました。

すると、さきほど線かきをしていたリーダーのEが「ぼくら、

走ってばかりいると、つかれてくるから、いっぺんかわって」といって、他の友の行動を見て回っていました。しばらくして、

E「先生、切符買っても、その子ら、のらへんに」
教「そう」

E「へんなの、どこ行き買ったの、名古屋行きだったら、あの車にのるのやに」

T「何、あれが名古屋行きてき」

S「うち、大阪行き買ったけど、汽車あらへんが」

E「そうやんか、だれかが作らなあかんの」と、そろそろリーダーの活躍が目立ちはじめました。

このように、その場その場で必要を感じ、二日ぐらい続けてしては、また別の遊びをしたり、思い出している汽車ごっこをするというように、断片的な遊びの発展から徐々に他人の存在を意識しました。創造的な活動の一面をみることできました。そこでこの遊びには、発展性があるから、ある程度ヒントを与えたり、役割など助言すれば、遊びの内容に計画性が生まれてくるかもしれないと予期して、意図的に小集団の構成や、その指導をした場合に

は、ある程度まで発展するかもしれないと考えましたが、現段階の幼児には、あえてそのようなことはしませんでした。それにしても、もっともたいせつなことは、このような、自然発生的なグループでのごっこ遊びを十分させてやることだと思っています。

(四) まとめ

一学期の指導において、もっともたいせつなことは、ひとりひとりの幼児の日々の活動において、満足した遊びをすることのできるようにしてやることであり、そのために、私どもは、最大の努力を払うべきでしょう。

すなわち、満足は、幼児のパーソナリティーの発達にとって、もっともたいせつなものであると思うからです。

つまり、幼児は幼児なりに、いろいろな満足を伴う活動を通して自分自身のパーソナリティーの欠陥を治療していくと思います。

そのためには、それぞれの活動の場面で、自由にのびのびと活動し、自己を発揮させてやるために、十分な遊び時間と、適切な環境とによって、安定感や満足感を得させることが必要であり、またその活動に調和と変化をもたせつつ、楽しく過ごさせるよう留意してやるべきだと思います。一学期をひとりひとりの幼児が十分に活動することにより、二学期の豊かな生活を期待したいと思います。

(四日市市立中部幼稚園)